SATSUMA×WORK

さつま×しごと

Vol.02

生産牛農家×中原光稀

なかはら　みつき
中原 光稀 さん（24）

いちき串木野市出身。５歳の頃に家族で父の実家である時吉地区に移り住む。幼い頃から畜産業を目指し、農業大学校在学時には、全国農業大学校等意見発表会で最優秀賞を受賞。卒業後、実家の生産牛農家に就農。父、母と畜産業を営み、妹も酪農を学んでいる。

▼鶴田地区にある牛舎で親牛90頭弱、子牛１００頭以上を育てる中原光稀さんは、生産牛農家に就農して現在４年目。県立農業大学校を卒業し、畜産業を営む実家の跡を継ぎました。「小学生のときには牛飼いになりたくて、お父さんの後を継ぐとずっと言っていました」と話します。

▼畜産業を目指すきっかけとなったのは、小学５年生の頃に可愛がっていた子牛がセリにかけられた時のこと。「売らずに母牛として育てたい」とお父さんに相談しました。売値が60万円に満たなかったら育てると決めていましたが、落札額は60万１千円。別れることになり悲しくて泣きました。しかし、『牛はペットではなく経済動物。この子たちを売って自分たちはご飯を食べられるんだよ』と言うお母さんの言葉に、悲しくもあったけどとても格好良く感じました。そこからずっと牛飼いになることが目標でした」と振り返ります。

▼幼い時から畜産農家を目指していた中原さんですが、高校は普通科に進学。「本当は農業高校に行きたかったのですが、お父さんから『色々なことを学んだ上で、それでも畜産に進みたいときには農業大学校に行きなさい』と言われました。高校に進学し牛から離れると『牛がいないと無理だ』と自分の中で存在が大きかったことが改めて分かりました。今では気付かせてくれたお父さんに感謝しています」と笑顔を見せます。

▼母牛の人工授精も担う中原さんは、母牛の受胎率の向上と子牛の出荷頭数を増やすことが目標。「人工授精は経験が大事。なるべく牛に負担が無いようにしなければいけません」と母体を守りつつ子牛を増やしていくことの難しさを話します。

▼一番の思い出は、和牛の品評会である共進会で地区のグランドチャンピオンを獲得したこと。「世話をしてきた牛が評価される共進会がとても好き」と話す中原さん。２０２２年に鹿児島県で開催される全国和牛能力共進会への出場を目指し、愛情と誇りを持って牛に向き合います。

「子牛の栄養を考えて３種類のエサを与えます」と話す中原さん。

人工授精に使う器具。免許を取得し人工授精を行っている。